彼方に潮が引いて、海草が見えた。「津波だ、にげろ！」と言われて走った。津波がどれほど速いスピードでやってきてどれだけ破壊力があるか、その恐ろしさが子ども心に焼き付いた。二回目が一九七八年の宮城沖地震だった。

経験則で今回の地震の揺れに、青井は津波が来ると確信した。

「三十年に一回、九十九パーセントの割合だ。だから絶対、津波は来る。全員、直ちに高台に逃げよ！」と、迷うことなく職員に指示した。

最後に誰も残っていないことを確かめて路上に出たとき、地震で頭をケガした人が血を流して診療所に飛び込んできた。硝子で数センチ切っていて、処置が必要だ。

青井はどきっとした。山崎医師と、看護師長、そして青井がうなずき合って覚悟を決め、引き返した。

患者は津波が来る予測などしていない。山崎医師に処置してもらいながら、ケガを医師に診てもらって、ホッとした表情を見せていたが、やがて、自分以外誰一人いない診療所の様子に、怪訝な顔をした。

青井は、治療が終わった患者へ手短に事情を説明し、一緒にいそいで避難するように告げた。高台にむかいひたすら走って、先発隊に追いついた。とっさの判断でデイサービスの老人たちを、近くのホテルに避難させた。

その直後振り向くと、松島の島々に津波がまさにぶち当たって押し寄せている瞬間が見えた。

壊滅的な被害をうけた「なるせの郷」

そして、こちらに向かってやってくる。

青井は言葉を失って立ちつくした。やがて次の瞬間には、猛吹雪が辺り全体を包み隠して、何も見えなくなった。

診療所は地震で内部が散乱状態の上に、床上浸水であった。水位はそう高くなく、関係者で命を落とした人はいなかった。しかし、一階は完全にヘドロがびっしり溜まっている。医療機器はヘドロにまみれていて、カルテが散乱していた。

他に被害はないか？　祈る思いであった。残念ながら、同じ松島医療生協の居宅介護支援デイサービス「なるせの郷」は、松島海岸から数キロ離れていたが、壊滅的被害をうけていた。

やがて、被害の全容が見えてくる。

施設利用者十一人が死亡し、土井芳子所長、介護士高橋まゆみ、同じく山崎やすこの三人が

ここから

殉職した。

この被害者は、地震の発生で「避難所」に指定された隣接する野蒜小学校に利用者を支えて避難する途中で津波に襲われた。

青井は言う。

「三日三晩電気が切れて真っ暗で過ごした。目に見える範囲の情報しか得られず、空を眺めると宇宙につながる星空が広がっていた。自分の生涯であんな綺麗な星空を見たことがないと思うほど、澄み切ってきらめいていた」

「その当時自分は冷静だと思っていたが、いま思うとそれほど冷静ではなかったかもしれない。仲間の死にうちひしがれて、泥にまみれながら、ヘドロをかき出しながら、二階で診療を再開した。支援の人たちが来てくれなかったら、乗り越えられなかったと思う。当時は支援の人の元気な姿さえ、負担に思うことがあったが、職員は歯を食いしばって頑張り、みんなのお陰でここまで来た」

「三ヶ月経った今でも、まだ、気持ちは回復していないなぁと自分で感じることがある。しかし今の時代に、それぞれ全国の事業所ではどこも経営が大変な中、人手も不足しているはずなのに、何をさしおいても災害の被災者支援に駆けつける。自分も、経営上の立場からも、それがどれだけ大変か、よく分かる。そのことをやってのける民医連は、つくづくすごいなぁと思う。自分はこうしてみんなに支えられている」

そう、思いませんか？　と、青井は取材者を正面からじっと見た。

「『なるせの郷』では、所長が亡くなった。遺体がなかなか見つからなかった。同じ職場で生き残った人たちは憑かれたように、当時は亡骸を捜しに行きたいと言う。仲間を失った悲しさからは、そんなに簡単に立ち上がれない。だからそうせざるを得ない気持ちは痛いほど分かる。しかし、僕は、いま生きている人をしっかり守らなければと、思おうとした。そんな精神状況をみんなで、乗り越えてきた」

その「なるせの郷」の同じ職場で、命の明暗を分けて、九死に一生を得た人がいる。その人の気持ちを聞きますか？　青井は取材者の心構えを確かめるように聞いた。

そのひと、安部加代子介護センター長は、静かに部屋に入ってきた。

時は巡り、震災から三ヶ月経って六月も末の頃、汗ばむ季節だ。

ほっそりと、優しげな面差しの人は、約束の時間に合わせようと駆けつけたようで、ハンカチで額を拭っている。

安部は小学校教員の夫、そして子どもは高校生の息子と中学生の娘がいて、夫の母と五人家族。震災まではケアマネジャーとして忙しいが、職場の同僚の人間関係にも恵まれ活気のある生活を送ってきた。そんな女性が「何で私だけが、生きているの？」という思いにさいなまれて、震災

後の三ヶ月を過ごさなければならなかった。

「もし、まだ体験を語るといったことが辛いようでしたら、無理にそれをお願いしてはいけないように思います。負担でしたら、遠慮無くおっしゃって下さいね。お会いできただけで十分うれしいのですから」

そう挨拶すると、弱く笑ってこう言った。

「正直言って、まだ、誰にも話したくない。心の整理もついていない。それでよかったら。全国の仲間の人が支援に来てくれて、その時は支援隊の人には申し訳ないけれど、挨拶などできなかったし……。そんなありのままで、いいですか？」

「ええ、ええ、けっこうですとも。……それにしても、すっかり暑くなりましたね」

ふと、窓の外に目をやって、夏の雲を見た。傷ついている彼女に、傷口を広げるような会話を強いてはならない。しばらくの沈黙のあと、そっと引き揚げようと心に決めたとき安部は、顔を上げた。

そして、問わず語りで、話し出した。

「その時、私は、利用者さんと肩を寄せ合ってうずくまり、長い揺れが早く収まって欲しいとじっと耐えていました」

デイサービスに通う利用者は、施設で仲間とともに身体の状況に応じて交流し、生活にメリハリを付けた時間を過ごす。

仙台から松島寄りに位置する野蒜地域「なるせの郷」では、三月十一日は比較的健康に恵まれている半分の利用者がドライブに行き、安部は残ったお年寄りと午後の時間を過ごしていた。

ドライブに出かけたグループは、施設に帰る路上で震災に遭う。

「道が波打って、前に進めない。恐ろしかった」

やっと施設に帰り着けた安堵から口ぐちに恐怖を共有した。残っていたお年寄りも合流して「避難所」野蒜小学校にともかく避難しようという判断で、土井所長を先頭に施設をあとにした。小学校は施設のすぐ隣、校門まで十メートルなのだ。

安部は、「家が高台にあるから、津波の心配がない家に帰りたい」という利用者市川郁子を、歩いて自宅まで送って行くことになった。

郁子の手を引いた安部が亀岡の踏切にさしかかったとき、近くにいた男性が「津波だ！」と叫び声を上げた。

ギョッとして振り返ると、すぐ先に高さ四メートルほどの「水のカベ」が迫っている。瞬間、視界が遮られた。ガボガボッゴーッという音とともに、水に呑まれた。

「郁子さん、いちかわさーん！」

つないでいた手が離れた利用者の名前を、必死で呼んだ。

急に水に入った異様さは、名状しがたい。石油の臭いが強く感じられたが、透明な水で流れる威力は強く感じなかった。

職場の仲間も生

加代子さん（介護相談センター長・同前列中央）。「私は幸運にも生かされました。戻れる職場、仕

つかずのままに自宅を放置してきたや、自宅へ戻れない方もいます。こした方々への支援も必要です（佐藤ん）。

3千人、県内最大の被を受けた石巻市をはじ気仙沼市、南三陸町な8自治体を訪問して再生、復興への申入

水の中で、近所の歯科医院に勤める歯科衛生士の、ピンクの着衣が目についた。
流されながら歯科衛生士と、声を掛け合った。彼女は安部を励まして笑顔さえ浮かべ、水の中で「邪魔になる」とカーディガンを脱いだ。後日、彼女の死を知った。
第二波が来た。
瓦礫が押し寄せ臭いも強い。突然瓦礫が頭の上に来た。
「明日からの私って、無いの？　死にたくない！」
必死でもがいたら、水面の上に浮かぶことができた。そのまま、流されるままに、流れた。
三度目の大きなうねりは、臭い黒い水だった。
津波に襲われてどれくらいの時間が経ったのか、よく分からない。
山のふもとのような感じの辺りの様子で、家の屋根やプロパンガスのボンベが横になって流れてきた。
プロパンガスのボンベによじ登ったことで、流れているトタン屋根にはい上がることができた。
「たすけてくださーい!!」
渾身の力を振り絞って誰にともなく、ひたすら叫んだ。叫び続けた。
すると、山の方角から男の大きな声がした。
「自分でやるしか無いんだ！」
雪が降る。風も強い。

やがて暗くなってきた。
ガタガタと全身のふるえが止まらない。止めようとしても、歯の根が合わずガチガチ鳴る。
「頑張れ、ヒマラヤはもっと寒い、がんばれ」
自分を励ますために自分に向かって叫んだ。
今にして思う。あのプロパンガスのボンベが流れてきたとき、無意識でそれに摑まった。すると、トタン屋根があってそこに登ることができた。何か死に向かう淵で、いくつかの分かれ道があって、自分は死なない方に、何かの力で向かわせられているように感じる。そうとしか思えないような不思議さが次々と起きた。
真っ暗闇の中を流されていると、流されていない家々が黒い影のように現われて、いくつかそこに建っていた。どれも一階は屋根まで水に浸かっているのが分かった。
ふと気がつくと屋根の上で懐中電灯を持った男がいた！
力を振り絞って、叫んだ。
「たすけてーっ、たすけてーっ」
すると男は気づいたようだ。こちらを向いた。
よかった、と思った。
しかし、そこを動かず男は、毅然として言う。
「そこには行けない。その家に摑まれ。それで、二階に行けーっ!!」

【職場の仲間も写】

に変形していた佐藤加代子さん（介護相談センター長・同前列中央）。「私は幸運にも生かされました。戻れる職場、仕

死者・行方不明者3千人、県内最大の被を受けた石巻市をはじ気仙沼市、南三陸町な8自治体を訪問して再生、復興への申入

歩します（佐藤さん）。仮設には手つかずのままに自宅を放置してきた方や、自宅へ戻れない方もいます。こうした方々への支援も必要です（佐藤さん）。

二階？　摑まる家？　……すぐ傍に、二階建ての家の一階の屋根がある。とっさに、安部は、流れているトタン屋根から手を伸ばし、その家の屋根に摑まった。そして一瞬、屋根に飛び移った。

トタン屋根は、ゆっくり流れ去った。

一階の屋根から、必死で二階のベランダによじ登る。

胸の動悸を鎮め、荒い息を収めようと深呼吸をして、ふと、空を見上げた。

なぜ、その時空を見上げたのか、自分では解せないが、とにかく放心状態で見上げた。

「しゃくに障るぐらい澄み渡った空」が、そこにあった。

星が瞬いている。その美しさと言ったら――。生涯忘れられない、見たこともないほど美しい星空だった。

星の輝きを見て、よたよたと、その家のガラス戸を開けた。

なんとそこには濡れていないベッドと蒲団、そしてふかふかのソファーがあり、ソファーの上に洗濯物を取り入れたばかりという風情の小学生のトレーナーがあった。

安部は濡れた衣類を全部脱いで、小学生のトレーナーを着た。そしてそのまま毛布にくるまって、ベッドに倒れ込んだ。

なぜ眠れたのか、気を失っていたのか、わからない。

気がつけば朝だった。

一瞬、ここはどこだ、と思った。

大きなヘリコプターの音で、我に返った。ベランダで一生懸命手を振ったが、ヘリは気づかないのか、立ち去った。

やがて、水が引いたらしく「山に避難していた」という家の人が帰ってきた。

ぼう然としている安部を見て、その家の主婦は言った。

「たすかって、よかったねえ」

そして、水とドライフルーツを家族と同じように、分けてくれた。

二日後、やっと歩けるようになって、その家をあとにした。

瓦礫で道はなくなっていたが、野蒜小学校を目指した。

しかし、どうしても「なるせの郷」が気になって仕方がない。避難所を後回しにして、恐るおそる「なるせの郷」に行ってみた。

誰もいない。硝子はことごとく破れて無くなり部屋の中はヘドロだらけで、知らない人が階段に腰かけていた。異次元の世界に来たような錯覚を覚えた。

我に返って、組合員さんたちはどうしているだろう、どこも被害がひどくて、海岸診療所の人も来られないに違いないと考えた。

見渡すと、国道四十五号線のあたり一帯は、昔、教科書で見た「敗戦後の焼け跡」のように建物が何もなくなっている。

夫や子どもはどうしているだろう、家は海から遠いので多分大丈夫に違いないと念じた。しかし、この世の中に自分一人になったらどうしようという思いが、心の底流でずっと渦巻くようにあった。

避難所の野蒜小学校では、たった一人で幽霊のようにやってきた安部を、優しく声をかけてくれる人もいなければ、ここにおいでと迎え入れてくれる人も、誰もいない。おそらく、誰もが被災したショックで、人のことなど構っていられない精神状態なのだと思うことにした。その時は、その場所で仲間たちが亡くなったこと、同時に多くの人が亡くなったことなど考えられなかった。

その場に現われた世話役のような人に、「家に帰りたい」と言ったが、「個人は送れない」と断られた。

何も考えることもできなくて片隅でボーッとして、半日ほど座っていた。

そんな中を、鳴瀬中学校の教師が自分も被災しながら、食料を持って生徒の安否確認に回ってきた。

声をかけられた。被災後初めての顔見知りである。事情を話すと、その人は家まで車で送ってくれた。

家に帰ると、子どもが二人とも無事だった。

「お父さんは、避難所にお母さんを捜しに行った」という。

家にたどり着いてほっとしても、心が固まってしまっていて、家族が無事でよかったと思うも

のの、泣いたり笑ったり、取り乱したりできなかった。そして、「なるせの郷」のことばかり気になって、仕方がなかった。

何日か過ぎてから、利用者のお年寄りとともに、避難先の小学校で所長と高橋が亡くなったこと、もう一人の山崎は車を移動するために車に乗ったまま亡くなったことを知った。

安部は思う。

土井所長は自分が助かるように動けたはずなのに、お年寄りとともにいたに違いない。遺体が発見されたとき、歯が折れていたという。所長はそうやって仕事をまっとうした。最後はどんな思いだったのだろうか、辛かったに違いない。

自分はあのとき、所長のように何かできなかったか？　自分に、何が足りなかったのだろう？　なぜ、自分だけが生きているのだろう？　その呪縛からどうしても、逃れることはできなかった。

安部加代子は、話しながら滂沱の涙を流した。

涙は止めどなく流れているのに、表情は遠くの方を見ている感じで、悲しみを表情に表わさない。身体を硬くして、ただ泣いていた。話すのを止めたらとか、もういいですよ、楽にしたらとか、一言も口を挟む余地はなかった。黙って安部と一緒に涙を流すしか、仕様がなかった。

長い沈黙が続いて、ふと安部は我に返ったように取材者を、はじめて、見た。

「自分が死ななくて、生かされた意味はまだ分からないけれど、もう駄目、と思っても人間、何かできるものですね……」

そう言ってほおは濡れたまま、はにかんだような笑顔になった。

全国の支援者は、松島海岸診療所の泥出しや地域訪問で訪れた際、殉職した人の話とともに、九死に一生を得た安部加代子の話も聞いている。

四月に入ってすぐ、支援者がまだ被災のあとも生々しい地域訪問を終えて、海岸診療所に戻ったとき、二階のデイケアのお年寄りたちが、歌を歌っていた。

そのお年寄りとともに介護士たちは、ニコニコと笑顔で、大きな声で歌っていた。

――松島の、サアヨ、瑞巌寺ほどの、寺もないトエ、

あれはエー、エトソリャ、大漁だよ　エンヤ、トット、エンヤ、トット――

看護師の支援者は、帰った後「震災支援ニュース」に感想を寄せていた。

「辛いことがいっぱいあっただろうに、辛い顔をしていたらお年寄りが一層悲しいだろうと、介護士さんたちは笑顔をつくって一層大きな声で、歌っていました。その時、私は電気で撃たれたように涙が止まりませんでした。エンヤ、トットと船を漕ぐ介護士さんのあの笑顔が、今でも浮かんできて、涙が出ます。あの人たちは頑張っている、わたしも頑張ろうと思います。支援に行って、本当によかったです。あのとき何ほどのこともできなかったので、また、行きたいです」

長野県民医連事務局長岩須靖弘は、観光も、漁業も、農業も大きな打撃を受けた地域の支援活動のあり方について問題意識を持って一週間現地入りしている。

その時、松島医療生協の大友昌理事長をはじめ、職員のけなげな明るさに感動したという。

「地域の人たちは、支援者の訪問で、三週間ぶりにまともな会話をしたと言ったり、三陸は高齢化率が非常に高いから、お年寄りはいたる所で堰を切ったように話してくれる。そういう地域の人たちを励ましながら、職員・組合員の人たちは頑張っている。僕たち支援者は、帰って行く所がある。あの人たちは逃げる所がないのですよ。本当にえらいなぁと感心しましたよ。僕は支援を終えて帰宅したとき、自宅の中に入ってどっこいしょっとテレビをつけて座った。そこにはいつもと変わらない我が家がありましてね。つい何時間前までは被災地のすさまじい姿と向き合っていた。なぜか、松島のことがワッとふくらんできて、あの人たちの姿が浮かぶ。どういうわけか、ビールを飲もうにもね、涙が出てきて止まらなかったです」

取材者は、支援に来た人たちの感想を、人間として生の声でそのいくつかを、安部介護センター長に話した。

安部は、微笑んでそれを聞いていた。

そして、言った。

「生きていれば、お互いどこかできっとまた、逢えるでしょうね。逢いましょうね」

宮城民医連の資料によると、職員の死亡四人、職員のケガ十三人、家族の死亡と行方不明三十三人、家屋の甚大な被害六十一人、車両被害十三台となっている。

(4) 職人の魂——【宮城県・長町病院、若林クリニック】

仙台市太白区長町にある財団法人宮城厚生協会長町病院は、内陸部寄りで津波はまぬがれたが、長町病院附属クリニック（五階建て鉄筋ビル）がマグニチュード九・〇、震度七の地震で、倒壊の危険があるため、行政から「立ち入り禁止」の指示が出された。

その被害のスケールだが、損害だけで七億円、ビルの取り壊しに一億数千万円かかる。建て替えるには十億円が必要だ。

長町は広瀬川の河川敷に当たる。長町病院はそういう地形の中にあった。山を削って住宅地を開発したところも多く、地域一帯ではマンションが大きな地震被害を受けた。

地震が起きた時は通所リハビリに四十人とデイサービスに十二人のお年寄りがいた。外来にはまだ、十人余りがいた。

お年寄りたちを地震の被害から守るために職員が上に被さったり、蒲団を被せたりでその場を

ココまで

凌いだが、利用者とともに日ごろから避難訓練をしていたので、落ち着いて行動できた。病院の大きい建物に避難させるとき、エレベーターが使えず、車椅子の人は四人がかりで一人ずつおろした。

「帰るのが怖い」という独居老人は三日間、通所施設職員が泊まって世話をした。

病院でも四階の病室は使えなくなって、そこにいた入院患者四十人は、リハビリスタッフ五十人が狩り出され、総出で一階におろした。二、三階の病室は大丈夫だった。

「二百人の職員は、獅子奮迅の活躍だった」

花木かよ子クリニック事務長は、元気印を体中にあふれさせているような人だが、地震の話になると声がいっそう大きくなるようだ。

「まず、災害医療受け入れの態勢を作り、地域の避難所などの医療活動に気を配り、もちろん病院内では、停電のため自家発電に切り替え、倒壊の危険があるクリニックの重油を移し替え、セントラルキッチンに食材支援を訴えた。在宅の安否確認は七百人もある」

長町病院では、その日から、一日、災害患者三百～三百六十人の外来患者を迎え入れている。震災後一週間というもの、院内は、廊下と言わずフロアでも、空いているところすべてには患者というか、人であふれかえっていた。

確かに職員は、獅子奮迅の活躍であったに違いない。

「どんなに忙しくても、私はやっぱり看護部長として、民医連の病院に勤めていてよかったと